

2. 第2回サマースクール in 海士 & 新宿日本語学校留学生海士体験 2006

サマースクール in 海士 2006 の来訪参加者は、仏人参加学生 13 名、同校日本人スタッフ 3 名、仏在住一家（日本人母、年長男児 1 名、小学 2 年生 1 名）計 19 名 新宿日本語学校留学生海士体験 2006 については、同校留学生（韓国人 3 名、中国人（台湾）1 名、マレーシア人 1 名 計 5 名 町内参加者は、両方で 433 名となった。

実施内容についての評価と感想

(1) ホームステイ

- ・ホームステイを受け入れる人が固定してきている。反面、受け入れるホストファミリーの中では、受け入れが定着し、ホームステイ中の様々な交流、サマースクール終了後の交流に繋がっている。ホームステイは、多くの体験プログラムの中でも、海士町の暮らしの中に入って、親密な交流ができるという点で、特に外国人との交流事業では重要なものとなっている。

(2) 日程・プログラム

- ・小中学生との交流では、素直な子供たちの姿は仏人に感動を与え、子供達にとっても、視野が広がり、海士の良さを伝え、外国人から海士の素晴らしさを認められる体験ができたことは非常に有意義であった。2 年目ということで、交流内容についても各学校で工夫が凝らされていた。
- ・今年は島前高等学校との交流も取り入れ、スポーツ交流や調理実習、書道等の授業に参加した。年齢が近いこともあって、相互にとって国際交流のよい機会となった。今後、さらに内容を深めることで、島前高等学校の魅力アップにも繋げられる可能性が包含していると言える。
- ・新たなプログラムとして、書道体験や茶道体験、着物の着付け体験、うどんづくり体験など、日本の文化に親しむ体験を加え、指導者としても、地域の人々に参画してもらったことで、島内における交流の幅が広がり、交流事業について地元住民の理解を深める上でも意義深い結果となった。
- ・昼食は昨年に引き続き、中学校のランチルームで中学生と一緒に学校給食を食べた。短い日程の中で、中学校との交流の時間が確保できない為、給食や昼休みの交流が中学生にとってよい機会になったようだ。
- ・夕食では、島内のいろいろな飲食店に出かけ、ゆったりと夕食を摂ることができた。夕食の時間を通して、参加したメンバー同志のつながりが深まる機会となった。また、島内の飲食店へ出かけることで、お店の人や他のお客との交流も生まれた。
- ・昨年のハードすぎる日程の反省を活かして、フリーな部分を増やすことで、何も予定が無い中から、思わぬ交流の深まりや拡がりに繋がったようだ。
- ・地区の祭りの体験は、地域の人と協働で祭りを作り上げる事で、盛り上がりや達成感も強く、多くの地元住民と関わることができる最高の舞台となった。練習に参加し、直会（打ち上げ）にも参加させてもらえたことで、充実した祭り体験となった。

(3) 日系児童との交流

- ・サマースクール参加者の家族が同行し、子供達は、一週間、地元の保育園や小学校に通うという体験をした。フランスの子供にとっても、海士町でいろいろな体験を通して、海士町の子供達と友達になり、交流の輪が保育園へと広がった。
- ・町営住宅で生活したことによって、家族ぐるみで地域の人々との交流につながり、大変よかったようだ。来年についても、1ヶ月の長期滞在を既に予約している。

(4) 留学生海士体験

- ・キンチャモニャ祭りを中心とした交流を行った。
- ・島前高校の韓国修学旅行事前学習として、留学生に授業をしてもらうという、新たな試みを取り入れ、高校とのつながりが強まった。
- ・学校外で日本人と触れ合うことや、日本人と会話すること、田舎の生活や文化の体験は、日本に滞在して日本語を勉強中の学生にとって、東京では味わいにくい、古き日本の素晴らしさを実感できる絶好の機会となったようだ。

2年目を終えての課題として

サマースクールとして同校から提供できるプログラムは、2年間の経験を通してほぼ確立できたようだ。海士町の自然や歴史、文化、地元住民との交流等の滞在プログラムは、外国人にとっても魅力的であることが、参加者の感想や終了後の繋がり、リピーター(マルレーヌさん：1ヶ月以上のインターンシップ活用)の出現などでも明らかとなった。日本の小さな離島で地元の人々と交流しながら日本語を勉強するということは、真の日本を海外にアピールする上でも意義深いことである。

今後も国際交流の機会を拡大しようとする、ホストファミリーを増やすことが重要である。また、交流事業全般を地元住民に理解してもらう為、できるだけ多くの人々に関わってもらえるようなプログラムを工夫してきた。しかし、まだまだ十分周知されていない。広報、回覧版等様々な方法で地元住民への周知・啓発する必要を強く感じる。

日数や経費上の負担を負ってでも「サマースクール in 海士」を開催しようとする新宿日本語学校側の熱意がなければ継続は不可能であり、受け入れる海士町側においても、よい交流を進める為には、人的・財政的支援体制が必要である。また、行政主導の事業展開を民間主導の転換することも検討しつつ、継続の形を模索すべきである。

離島でしか経験することができないような交流事業であり、これを継続発展させることこそ、国際交流への大きな可能性を期待できるものである。